発表内容

1）醸造用原料の安定調達のための地産化
　　・生産者とのかかわり、関連機関との連携
2）大豆の多収化に向けて
　　・醸造用新品種大豆　たつひめ
　　・亜熱帯化干ばつ対策の栽培技術例
3）発酵諸味粕堆肥による資源循環型農業
　　・2年3作＋土つくり(ASK)
　　・ASK(発酵諸味粕堆肥）の高度利用
4）まとめに入ります

新品種導入・多収化技術普及が急務！＋「教育」

国も 気象変動を踏まえた

品種開発[1]
- 多収新品種導入
- 温暖化対策品種

対策技術の普及[2]
- 播種時期を遅らす
- 複数作柄の並行栽培

を急ぐ

日本農業新聞 www.agrinews.co.jp 2024年（令和6年）1 24 水曜日

温暖化でも安定生産

産地の動き活発

播種遅らす■複数作柄を並行

温暖化が進む中でも農作物を安定生産しようと、暑さに強い産地づくりに向けた動きが活発化している。作型や品種構成、防除方法の見直しなど、抜本的な対策を進める産地も出ている。国も、気候変動を踏まえた品種開発や対策技術の普及を急ぐ。

▶10面に連載「高温の解法」

宮城県が今月に決めた2024年産米の方針では、田植え時期を例年より1週間以上遅らせ、5月下旬に設定した。出穂時の高温が主因となる白未熟粒の発生を抑えるためだ。移植を遅らせることで出穂期も8月中旬と1週間ほど後ろ倒しにし、高温に当たるのを回避する狙いだ。

関東最大の小麦産地・埼玉県熊谷市でも、本年産小麦で初めて、播種（はしゅ）時期を5日遅らせる技術情報を県が発出した。暖冬傾向が続く中、従来通りの播種では分けつが過剰に進み、減収が懸念されるためだ。県農業技術研究センターは「暖冬年が増える中、適正な播種の時期・量を見直す必要性が高まっている」と話す。

気候変動の中でも、契約栽培では定時・定量・定品質の出荷が求められる。加工・業務用キャベツの契約栽培に取り組む愛知県のJA豊橋キャベツ部会「てつコン倶楽部」は、「出荷先への〝欠品なし〟を当たり前に

温暖化による影響と産地で進む対策

	影響	対策
水稲	白未熟粒の発生による等級低下	高温耐性品種への転換、遅植え
小麦	過剰分けつによる減収	播種時期の後ろ倒し
キャベツ	生育前進で出荷量が不安定化	高温、低温に対応した作型を並行導入
トマト	タバココナジラミが多発	地域全体で一定期間休作

（取材を基に作成）

品種・栽培技術の導入動向/要望

1）新品種で多収化達成⇒**儲かる農業**

・新品種導入：多収化、環境対策に必須
⇒新品種導入サイクルの短縮（新品種栽培面積の早期拡大）⇒**制度改革**

・安定生産　：米と同様（早生・中生・晩生）
⇒麦も大豆も多様化で安定を図る⇒**複数品種導入**

・種子生産　：生産拡大に伴い「種子の増産」、安定のための複数品種化「多品種対応」
⇒**種子生産の門戸を広げる**　⇒　高レベル生産者

2）革新技術で省力化と収益性改善⇒**担い手確保**

・米：育苗、田植えの無い米作り ⇒灌水/乾田直播 ⇒ **ドローンで灌水播種**

・更に　**麦、大豆　のドローン播種へ！？**

3）**2年3作(米+麦+大豆)+土つくり体系 ＆ 技術の集約 ＆ 教育の場**

・生産団体の「2年3作体系」を一気通貫で捉えた技術開発で生産性を向上

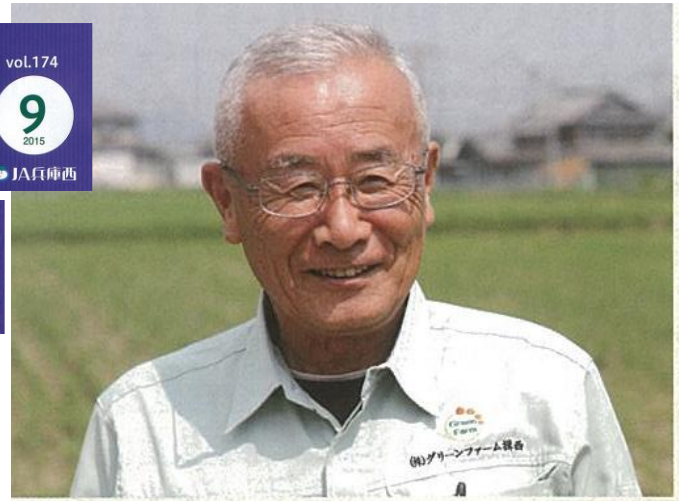
・**新品種導入**、**種子生産**、**栽培技術試験**を併せ「**教育**」をこの仕組みで担う

・**「農商工・公の連携した団体」に対する支援の制度はありませんか？**

「原料の産地から お客様の食卓まで」責任を持ち、「楽しく、豊かで、安全な食生活」に貢献します

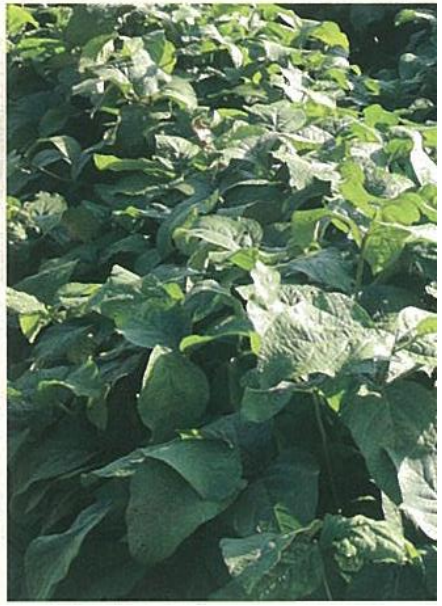
JA兵庫西の元気生活応援ジャーナル
にっしい広場
vol.174 9 2015 JA兵庫西

◆特集
絆を深める契約栽培



売り手の顔が見えることは心の励み

株式会社グリーンファーム揖西
猪澤敏一さん



「営農組合として、付加価値を付けた農産物を高く売っていくというやり方もありますが、私たちは先祖代々受け継いできた地元の田んぼを、利益が上がる形で継承していきたいという思いが強い」と猪澤さん。

「売ることよりも、いいものを作ることに力を注ぎたい」という思いは「地元産のよい原材料がほしい」というヒガシマル醤油(株)のニーズと合致し、契約栽培という形へ結びついていきました。「友人や知人にモノをあげるとき、少しでもいいものをと思いますよね。それと同じ。どこに売るか分かっているからこそ、いいかげんなことはできない。自然にみんなが熱心に取り組むようになり、技術力も年々上がってきました。売り手の見える農業は心の励みになります」。生産者と実需者の連携は、意欲と技術の向上につながっています。